

談話標識の特質：単独で用いられる 談話標識を手がかりに

松 尾 文 子

1. はじめに

談話標識とは何か、また具体的にはどのような項目のことを指すのか。

談話標識を統語論・意味論の範囲では扱うことはできない。談話標識の多くは文頭で用いられるが文中や文尾も可能で、統語構造には組み入れられない。また、単一の品詞ではない。意味論的に言うと、文脈を離れて談話標識自体の意味を記述することはできない。このように談話標識は節構造の外にあり、なくても発話の命題の意味に影響を与えないとされるが、談話標識はそれ自体で独立した発話の機能も持ちうる。それ自体で独立した発話の機能を有するということは、「情報量」が少なくないことを意味する。

談話標識にはどのような項目が含まれるのか。and, but などの接続詞、though などの接続副詞も含めた副詞 (actually, now, then など)、oh, well などの間投詞、you know, I mean, by the way などの決まり文句的な表現まで様々である。

本論では談話標識はそれ自体で独立した発話の機能を持ちうることに注目し、単独で一つの turn として用いられる談話標識を分析することによって、談話標識の特質について論ずる。

2. 従来の研究

現時点で談話標識を的確かつ包括的に扱う記述は存在しない。分析の観点によって様々な記述が見られる。これは談話標識が多様性に富むことの現れである。従来主な研究をあげる。

- ①Schiffrin：談話分析的アプローチ。談話標識は談話の5つの plane (レベル) のうち単一の、あるいは複数の plane で作用し、多機能的である。
- ②Blakemore：関連性理論のアプローチ。談話標識は、後続の発話をどのように解釈するかに関する手がかりを聞き手に与える手続き的意味を持つ。
- ③Fraser：pragmatic marker の一種で先行発話と後続発話の関係を示すものを discourse

marker とする。¹

- ④Aijmer：コーパス言語学的アプローチ。談話標識は、命題の意味からテキスト的・対人的機能を持つものへの変化を経た語彙項目である。
- ⑤Bordería：機能文法的アプローチ。接続表現は、文・発話レベルの連結能力を持つ central なものと、この能力が欠如する peripheral なものの間で様々な機能を持つ。

3. 談話標識のみで一つの turn が形成される場合

Rouchota (p. 19) は関連性理論の立場から、談話標識だけで一つの turn を形成する発話に関して、以下のように述べている。談話標識に相当するものの一部を談話接続語と呼び、発話と発話をつなぐ手段であると考えすることは説得力がないとしている。

(1) の発話状況として次のような状況を考えてみる。昇進してもよいはずなのにできなかった同僚 Jane がいる。上司は彼女が昇進できなかった理由を説明しようとする。今年は他に昇進すべき人がいた、彼女は若すぎる、応募者全員を昇進させるほどの経済的余裕がない、などである。それに対して話し手は (1) のように答える。

(1) *Still...*

(2) *Still, Jane should have been promoted.*

- (3) a. The excellence of Jane's research justifies early promotion.
- b. The money necessary for one more promotion should have been found.
- c. Jane has not been treated fairly.
- d. Other people who are not as good as Jane hold higher posts.

(1) は (2) を省略した返答ではない。聞き手は (1) を解釈する時、(3) で示されるような想定を持ちうる。その範囲は、still によって制限されている。

(1) の発話状況によって、聞き手がいずれの想定を選ぶかは異なる。たとえば、話し手は (3c) を言いたいのだろうと聞き手が考えれば、「いや、公平に審査したよ」と答え、(3d) ならば「結局は年功序列だから仕方ないよ」と答えるかもしれない。

4. 本論の立場

4.1. 文脈

談話標識を発話と発話のつながりを示すものとすると言明のつかない現象があることは、

Rouchota, Blakemore (2002, 2004) などで指摘されている。

(4) [speaker sees hearer come in laden with shopping]

So you've spent all your money. (Blakemore 2004: 113)

(5) [speaker takes an enormous slice of cake] *After all*, it is my birthday. (*ibid.*)

(4) では話し手は手いっぱいの荷物を持って部屋に入って来た相手を見て、「持ち金をすっかり使ってしまった」という結論を導き出している。(5) では話し手は飛びぬけて大きな一切れを取って、「だって、私の誕生日だから」と、自分の行動の理由を述べている。いずれの場合も、先行発話自体が存在しないので、談話標識は先行発話と後続発話の関係を述べているとは考えられない。²

同様の事例をあげる。

(6) The policeman looked at Charlie and Charlie smiled back.

"So you know about the robbery?" queried the man. (B. Freemantle, *Clap Hands, Here Comes Charlie*) 警官がチャーリーに目をやるとチャーリーは微笑み返した。「では、盗難事件のことはご存じなんですね?」と警官は尋ねた。

(6) では警官は発話からではなく、チャーリーの様子を見て so 以下の結論を導き出している。このことから、談話標識は談話において、発話と文脈をつなぐものだと言える。ここで言う文脈とは、実際の発話以外に発話の場面、具体的にはその場の状況や相手の反応、話し手が持っている知識なども含まれる。話し手の知識は広範囲に及び、話し手が潜在的に持っていて、当該の発話によって記憶から呼び起こされるものもある。

談話標識を考える上で「文脈」は極めて重要な概念である。談話（会話）は参与者の相互作用的な活動であり、談話を構成する際にはどのような文脈で発話し解釈するのか、どのように会話が進んでいるのかを示す手がかりが必要である。その手がかりの機能を果たすのが談話標識である。文脈には発話以外の非言語的な要素も含まれ、沈黙や表情、身振りも文脈を作る役割を果たす。言語的には発話内容のほかに、イントネーションなども文脈を作る手がかりとなる。

このように考えると、文脈はあらかじめ与えられる静的なものではなく、談話の参与者の相互的な活動によって作られる動的なもので、参与者は文脈を「察しながら」発話をし、新たな文脈を作り出して行くと言える。文脈は、一つの発話で、また発話の場面の状況などで変わっていくものである。³

4.2. 統語的・意味論的記述から機能的記述へ

ここまでで明らかなように、談話標識は文レベル以下の言語単位のつながりだけでは説明できない。参加者の相互作用的活動である一連の談話において、談話標識を含む当該の発話の意味や話し手の意図を理解するには、発話を統語的・意味論的に捉えるのではなく、どのような発話行為を行っているのかという機能面からの記述が必要である。このことを例証する。

(7) Excuse me, *but* I'm afraid this is a non-smoking area. (*LD*⁴) すみませんが、ここは禁煙区域です。

(8) "What was his cause of death?" I asked.

"I'm not sure. *But* it was natural." (P. Cornwell, *Body of Evidence*) 「彼の死因は？」と私は尋ねた。「はっきりとは分かりませんが、自然死ですよ」

いずれも *but* で2つの発話をつないでいる。(7) では「すみませんが」という前置き表現でこれから聞き手にとって良くないことを告げることに對する謝罪を表し、*but* 以下で自分の主張をしている。(8) では「はっきりと分かりませんが」と言い訳した上で、*but* 以下で質問に對する答えを主張している。それぞれ、謝罪+主張、言い訳+主張という発話行為をつないでいる。

4.3. 相互作用的功能

先に談話は参加者の相互作用的活動であると述べた。参加者はことばのやり取りなどによって文脈を形成し一連の談話を作り上げて行くが、文脈を作る手がかりとなる談話標識は当然、相互作用的功能を果たす。

具体的には、発話の開始や終了、話題転換などの境界を示す機能、話し手自身の発話の意図を伝えることで相手の反応を引き出して何らかの発話行為を行うよう促す機能、対人関係を調整する機能などが考えられる。

本論では単独で一つの *turn* として用いられる談話標識を取りあげ、境界指示機能と発話行為促し機能を中心に見て行く。それによって、文脈を構築していくこと、すなわち文脈化の手がかりとして、談話標識がどのように貢献するかを検討する。

なお以下の例文では、談話標識が単独（単独使用相当）で用いられる場合は太字かつイタリック体に下線を施し、その他の場合はイタリック体で記す。

5. 沈黙 ⇒ 境界指示

一連のやり取りのあと沈黙が生じ、談話の流れが変わることがある。談話標識 *well* は、しば

しばし沈黙の後に用いられる。会話においては、沈黙は実際の発話に相当する文脈化の手がかりである。次例は、私（探偵）が依頼者のパットンを訪ねた場面である。

(9) Patton went around his desk and sat...

“*Well*,” he said after a time.

I smiled.

“*Well*,” he said again. “I guess there’s nothing to do but purge right in.” (R. Parker, *Family Honor*) パットンは机の向こう側に戻って座った。…「さてと」ややあって彼は切り出した。私は微笑んだ。すると彼は「さてと」と繰り返す、「そろそろ本題に入ろうか」と言った。

パットンは相手の名前に関する話をする。沈黙の後 *Well* で一連の会話の次の段階に入る境界を示し、新たな turn を開始する意志を表明すると同時に相手の反応をうかがう。相手は微笑むだけで何も言わなかったので再び話題を転換し、本題に入る前置き表現として *Well* を繰り返す。話し手の発話に対して聞き手が微笑むという反応も文脈化の手がかりとなる。

次例はメイコンと妹のローズの電話での会話である。妹が兄に電話をかけてきた。それで兄の妻のサラが3週間前に出て行ったことを知った。兄がそのことを長い間知らせなかったことに対して妹は不満を言い、サラの近況などを問い詰めた。

(10) “She was checking to see how you’re doing. She still cares. Did you talk at all?”

“No,” Macon said, “I just handed her the double boiler. Also that gadget that unscrews bottle tops.”

“*Oh*, Macon. You might have asked her in.”

“I was scared she’d say no,” he said.

There was a silence.

“*Well. Anyhow*,” Rose said finally.

“*But* I’m getting along!”

“Yes, of course you are,” she told him. Then she said she had something in the oven and hung up. (A. Tyler, *The Accidental Tourist*) 「彼女はあなたがどうやって暮らしてるか見に来たのよ。まだ心配してるのよ。彼女と話したの?」「いや。二重鍋を渡したただけだ。蓋をはずすあの道具もね」とメイコンは答えた。「まっ、メイコン。中に入るよう言えばよかったのに」「嫌だって言われるのが怖かったんだ」と彼は答えた。沈黙が流れ、ついにローズは「そうなの。いずれにせよ（サラを中に入れるべきだったわね）」と言った。

「でも、おれはちゃんとやってるよ！」「ええ、もちろんそうでしょうとも」と彼女は答えた。それからオープンに何か入っているのだと言って電話を切った。

双方がこのまま話を続ける意思がないことを示す沈黙のあとようやく、妹は *Well* で談話の境界を示す。さらに *Anyhow* で前の話題に戻って主張したかったこと（兄は妻を家に入れるべきだった）を言おうとした。Anyhow で妹の意図を察した兄が、「ちゃんとやってる（から妻を家に入れる必要はない）」と答える。

このように、沈黙で「一連の話題を終えたい、話題を転換したい」という文脈が作られ、それを受けて *well* で談話の境界を示すことができる。

6. 沈黙 ⇒ 境界指示 ⇒ 発話行為促し

沈黙のあと談話の境界が示され、さらに何らかの発話行為を行うことを相手に促す場合がある。次例は関係が破たんした夫婦の電話での会話である。家を飛び出した妻がカーペットを取りに行ってもいいかと訊いてきた。そのうち言い争いになる。

(11) “Just shut the door, Macon. Just walk away. Just pretend it never happened. Go rearrange your tools, why don’t you; line up your wrenches from biggest to smallest instead of from smallest to biggest; that’s always fun.”

“Goddammit, Sarah—”

“Don’t you curse at me, Macon Leary!”

They paused.

Macon said, “*Well*.”

Sarah said, “*Well, anyhow*.”

“So I guess you’ll come by while I’m gone,” he said.

“If that’s all right.”

“Yes, certainly,” he said. (A. Tyler, *The Accidental Tourist*) 「ドアを閉めればいいだけよ、メイコン。ただ立ち去って何も起こらなかった振りをすればいいだけよ。道具を並べ換えて来たらどうなの。スパナを大きい方から小さい方へ並べれば？ 小さい方から大きい方へじゃなくてね。いつも楽しそうにやってるじゃない」「ゴタゴタ言うな、サラー」「怒鳴らないでよ、メイコン・リアリー！」二人は黙った。やがてメイコンが「じゃあ」と言うと、サラは「じゃあとにかく」と続けた。「きみは僕の留守中に（カーペットを取りに）来るってことだね」と彼は言った。「それでも良ければ」「ああ、もちろん構わないよ」と彼は

答えた。

言い争いの末やり取りが途絶え沈黙が訪れる。沈黙を受けて夫が会話の流れを変えて話題を転換する意思を持って談話の境界を示し、かつ次に言うべき言葉を探していることが Well で表される。それを受けて妻が Well でことばをついで、さらに anyhow で会話を終了したい意思を伝えると同時に、電話をかけた目的、すなわちこの談話の本題に戻ってカーペット問題の結論を述べるという発話行為を相手に促す。anyhow に応えて、夫は So 以下で一連の会話から導き出される結論（妻はカーペットを取りに来たい+これだけの言い争いをしたのだから自分とは顔を合わせたくないだろう ⇒ 自分の不在中に立ち寄る）を述べて会話を終えて電話を切る。

次例も (11) と同じ夫婦に関する話である。夫の友人が自分の経験談を話した後の場面である。

(12) He sat back triumphantly in his chair. “So,” he said.

“So,” Macon said.

“So you get my point.”

“What point?”

“You have to let her know you need her.” (A. Tyler, *The Accidental Tourist*) 彼は勝ち誇ったように椅子に座り直し、「ということで」と言った。「ということって」とメイコンが返した。「ということで私が言いたいことは分かっただろ」「言いたいことって?」「お前が必要なんだからことを彼女に知らせないとだめだよ」

沈黙に相当する行為（椅子に座り直す）の後、話し手は So でこれで自分が言うことは終わりだと談話の境界を示すと同時に、先行発話から導き出せる結論を述べるという発話行為をするよう相手を促す。そのことを聞き手であるメイコンは理解できず、So と繰り返す。さらにそれを受けて友人は、「私の経験談から（結果的に）言いたいことが分かっただろう」と応じている。⁴

談話標識の so は談話の境界を示す機能としては、話題が逸れた後本題に戻る合図、新しい話題を導入する合図、談話終了の合図がある。Bolden (2006: 672) は、so が先行する発話は、通例、先行の行為が一段落ついたと考えられ、次の行為がすぐに始まらない個所で生じるとしている。

7. 発話行為促し

談話標識単独で独立した turn を形成する発話によって、相手に何らかの発話行為を行うこと

を促す場合がある。どのような発話行為が求められているかが、談話標識で示される。次例は友人同士の会話で、Mickey は子どもである。

(13) “How is life among the rug rats?” I said.

“Mickey has discovered that if he doesn’t eat I go crazy.”

“It’s good to have a resourceful kid.”

“The little bastard won’t eat anything but macaroni with butter on it.”

“So?”

“So it’s not balanced.” (R. Parker, *Family Honor*) 「子どもたちは元気?」と私は聞いた。「ミッキーは自分がちゃんと食べないと、私が怒るってことに気付いたの」「お利口な子どもがいていいわね」「あの子、バターをかけたマカロニしか食べないのよ」「それで?」「つまり栄養が偏るってことよ」

話し手は先行発話の意図が分からないので発言意図を確認するという発話行為を行い、さらにそれに答えるという発話行為を行うよう相手を促している。先述のように、イントネーションは文脈化の手がかりとなるが、疑問符で表される上昇調の音調が、相手の発言を促す文脈を作っている。それを受けて、話し手は So 以下で発言意図を述べている。

次例は、修道院に入っている女性と神父の会話である。

(14) “Hello, Father.”

“Hello, my dear Megan.” Mercedes Angeles said, “I’m afraid we have a problem, Megan.”

“Oh?” She wracked her brain, trying to remember her latest misdeed. (S. Sheldon, *The Sands of Time*) 「こんにちは、神父様」「こんにちは、ミーガン」「実は問題があるのです、ミーガン」とメルセデス院長が言った。「はぁ?」彼女は最近どんな悪さをしたのか思いだそうとして頭をひねった。

話し手が相手の発話で示される新しい情報を受け止め、かつその内容が予想外で理解しがたいことが Oh で表される。Oh は、話し手がたった今情報を受け入れたことを示す談話標識である。⁵ 上昇調で発話されることで質問という発話行為を行っていることが示され、さらに相手にそれに対して答えるという発話行為を促す。

8. 境界指示 ⇒ 発話行為促し

談話標識単独で独立した turn を形成する発話によって、一連の談話の境界が示され、相手に何らかの発話行為を行うことを促すことがある。次例は、互いに配偶者がいる男女の会話である。本屋で偶然出会い互いが気になっていた。電車で再会した二人は、その本屋で会う約束をした。約束の本屋には男が先に到着し、女が来るのを待っていた。女が遅れてやって来て、男の姿が見えた瞬間、遅れた言い訳をし始め、同時に男はずっと待っていたことを話し始めた。

(15) “*Anyway.*”

“*So.*”

“Here we are.”

“Yeah. *Well.*”

Customers were starting to look at them. They both spoke at once then laughed their apologies at each other.

“What?” she asked.

“*Well.* No. What were you...?”

“No, go ahead.”

“*Oh.*”

“Yeah.”

“*Well...*”

“It’s OK. I was thinking the same thing.” (K. Harper, *Falling in Love*) 「とにかく」「ということで」「僕たち出会えたってことだ」「そうね。ええ」(本屋の)客たちは二人の方を見始めた。二人は同時に口を開き、それから笑いながら互いにお詫びのことばを交わした。「何?」と彼女は尋ねた。「ええっと。いや。きみは…」「いえ、続けて」「あぁ」「ええ」「そのう…」「いいわよ。同じことを考えてたのよ」

男は *Anyway* で結果を述べて、話に一段落つけようと境界を設定する。女も「結果的には」という気持ちで *So* と答え、同時に相手に話を引き継いで欲しい気持ちを伝え、男に次の発言を促す。男はそれを受けて ‘Here we are.’ と発言する。続いて女は *Well* で次に発するべきことばを探して言い淀んでいることを示す。この後、発話として明示されていないが、2人は言葉を交わす。さらに男は女の ‘What?’ という発話を受けて答えようとするが言い淀んでいることが *Well* で示され、発言を続けるが最後まで言い終わらない。次に用いられる *Oh* で、男は女の発

話で示される情報を受け入れたことを示すが、再び発するべきことばを探して言い淀んでいることが Well で示される。女は Well で表される男の気持ちを察して、‘It’s OK.’ と続ける。双方が配偶者を持ちながら密かに会っていることと、互いに相手に対して恋愛感情を抱いていることを後ろめたく感じていることが感じられるやり取りである。この会話における一連の談話標識の使用は、談話標識がすぐれて相互作用的な機能を持つことを示している。これらの機能は談話レベルで見てこそ説明可能で、それぞれの発話単独では明らかにすることはできない。

9. その他

上述以外で談話標識が単独で独立した turn を形成している例をあげる。

(16) “Brenda and me did not speak to each other for very nearly every bit of nineteen and thirty-five,” Garner said. “January to August, nineteen and thirty-five. New Year’s Day till my summer vacation. Not a single blessed word.”

Macon’s attention was caught. “What,” he said, “not even ‘Pass the salt?’ ‘Open the window?’”

“Not even that.”

“Well, how did you manage your daily life?”

“Mostly, she stayed over to her sister’s.”

“*Oh, then.*” (A. Tyler, *The Accidental Tourist*) 「ブレンダと私は 1935 年は全くと言っていいほど口をきかなかったんだ。1935 年の 1 月から 8 月まで。正月から夏休みまで、挨拶ひとつしなかつたんだよ」とガーナーは言った。メイコンは興味を引かれて「何だって？『塩を取って』とか『窓を開けて』とも？」「そんなことも」「じゃあ、どうやって毎日生活してたんだい？」「たいがい、彼女は妹の所にいたんだよ」「ああ、それなら（何とか暮せただろう）ね」

まず相手の発話で示される新しい情報を受け止めたことを Oh で、続いてその情報に基づいて推論したことを then で示す。この 2 つの談話標識で、話し手が情報を受けて推論結果を導くという行為が行なわれたことが伝えられるのである。導き出された結果の ‘You managed your daily life.’ が明示されていなくても、この発話を理解するための文脈化の手がかりとして oh と then が機能している。

10. おわりに

談話標識は発話と文脈をつなぐ表現であるが、単に「つなぐ」こと以上の役割を担っている。特に会話においては、会話の本質である参加者の相互作用性に大きく貢献する。話し手は発話がなされる文脈を参照しながら談話標識を使用し、同時にあらたに文脈を構築して行く（文脈化）。文脈化の手がかりの一つとなるのが談話標識である。聞き手からすると、談話標識は話し手の意図を理解する際に重要な手がかりとなる。

注

- 1 pragmatic marker は、命題内容の一部を成さず、それ自体命題の意味に貢献しない。
次の4種類がある。basic pragmatic marker (メッセージのタイプ [発話の力]を表す) [I promise, please, etc.] commentary pragmatic marker (basic message に対するコメント) [fortunately, frankly, certainly, etc.] parallel pragmatic marker (sir, your honor などの敬意を表す marker と now, well, oh などの会話管理の marker) discourse marker である。
- 2 Blakemore (2004: 112-13) によると、文脈想定は先行発話から導出されるか、聞き手が記憶から状況を認識することによっても導出可能である。
- 3 関連性理論では、文脈は発話解釈に先だって唯一的に固定されているものではなく、発話の解釈に合わせて選択され変化し、より詳しく決定づけられていくもので、状況から与えられるものではなく、選ばとられるものであるとする。
- 4 Local & Walker (pp. 123-25) では、談話の境界で用いられる so に関して、次のような傾向を述べている。
holding-so : so の前後で話者交替がなく、同じ話題を続ける。so の前後に沈黙があり、ピッチは比較的高く、声大きい。
trail off-so : so の前後で話者交替がある。現話者は次の話者に話を引き継いで欲しいと思っている。so の前後に沈黙があり、ピッチは比較的低く、声が小さい。
- 5 Bolden (2006: 672-73) は、oh は他の人の発話や発話が行われる状況の結果として、話し手の注目や意識に状況の変化が生じた合図 (change-of-state token) で、今しがた気づいた、認識した、思い出した事柄を伝えるとする。
Schiffrin は、oh は情報管理の機能を担っていて、旧情報ではあるがたった今思い出した場合や、全くの新情報を得た場合などに用いられるとする。

参考文献

- Aijmer, K. 2002. *English Discourse Particles: Evidence from a corpus*. Amsterdam: John Benjamins.
- Blakemore, D. 1987. *Semantic Constraints on Relevance*. Oxford: Blackwell.
- . 2002. *Relevance and Linguistic Meaning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 2001/2004. "Discourse and Relevance Theory." In D. Schiffrin, D. Tanner & H. E. Hamilton (eds.) *The Handbook of Discourse Analysis*. pp. 54-75. Massachusetts: Blackwell.
- Biber, D., S. Johanson, G. Leech, S. Conrad & E. Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and*

- Written English*. London: Longman.
- Bolden, G. B. 2006. "Little Words That Matter: Discourse Markers 'so' and 'oh' and the Doing of Other-Attentiveness in Social Interaction." *Journal of Communication*. 56 (4), pp. 661-688.
- . 2008. " 'So what's up?': Using the Discourse Marker *so* to Launch Conversational Business." *Research on Language and Social Interaction*. 41 (3), pp. 302-337.
- . 2009. "Implementing incipient actions: The discourse marker 'so' in English." *Journal of Pragmatics*. 41, pp. 974-998.
- Borderia, S. P. 2006. "A functional approach to the study of discourse markers." In K. Fischer (ed.) *Approach to Discourse Particles*. pp. 77-99. Amsterdam: Elsevier.
- Carter, R. & M. McCarthy. 2006. *Cambridge Grammar of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fraser, B. 1990 "An approach to Discourse Markers." *Journal of Pragmatics*. 14 (3), pp. 383-395.
- . 1999. "What are discourse markers." *Journal of Pragmatics*. 31 (7), pp. 931-952.
- . 2006. "Towards a Theory of Discourse Markers." In K. Fischer (ed.) *Approach to Discourse Particles*. pp. 189-204. Amsterdam: Elsevier.
- 林宅男 (編著). 2008. 『談話分析のアプローチ：理論と実践』東京：研究社.
- Local, J. & G. Walker. 2005. "Methodological Imperatives for Investigating the Phonetic Organization and Phonological Structures of Spontaneous Speech." *Phonetica*. 62, pp. 120-130.
- 松尾文子. 1993. 「談話接続語としての *so*」衣笠忠司・赤野一郎・内田聖二 (編) 『英語基礎語彙の文法』 pp. 193-202. 東京：英宝社.
- . 2007. 「談話辞 *but* の用法の展開と対応する日本語」『六甲英語学研究・小西友七先生追悼号』第 10 号. pp. 241-255. 六甲英語学研究会.
- . 2009. 「英語の談話標識の特性 及び 日本語との比較」『論集』第 42 号. pp. 30-44. 梅光学院大学紀要編集委員会.
- 西川真由美. 2002. 「談話標識 *oh*」『英語語法文法研究』第 9 号. 英語語法文法学会. pp. 110-125.
- Raymond, G. 2004. "Prompting Action: The Stand-Alone 'So' in Ordinary Conversation." *Research on Language and Social Interaction*. 37 (2), pp. 185-218.
- Rouchota, V. 1998. "Connectives, coherence and relevance." In V. Rouchota & A. H. Jucker (eds.) *Current Issues in Relevance Theory*. pp. 11-57. Amsterdam: John Benjamins.
- Schiffrin, D. 1987. *Discourse markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 2001/2004. "Discourse Markers: Language, Meaning and Context." In D. Schiffrin, D. Tanner & H. E. Hamilton (eds.) *The Handbook of Discourse Analysis*. pp. 54-75. Massachusetts: Blackwell.
- . 2006. "Discourse marker research theory: revising *and*." In K. Fischer (ed.) *Approaches to Discourse Particles*. pp. 315-338. Amsterdam: Elsevier.
- Stubbs, M. 1983. *Discourse Analysis: The Sociolinguistic Analysis of Natural Language*. Oxford: Blackwell.
- Swan, M. 2005³. *Practical English Usage*. London: Oxford University Press.
- Longman Dictionary of Contemporary English*. London: Longman. 2003. [LD⁴]